

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

渦雷 第一話



文／レイラ・アズナブル
イラスト／エーカ

渦雷（からい） Cyclonic thunderstorm サ
イクロン・サンダーストーム

発達した低気圧や台風などの上昇気流によつて生ずる雷。周囲から吹き込む気流が、強い渦状の上昇気流を起こし、そのために渦の中心付近で発生する。

* * * *

「柊（しゅう）！ やめろっ！ まだ早い！」

柊の周りで空間が揺らぎだした事に気がつき、僕は叫んだ。

* * * *

彼、林野柊（はやしの しゅう）と、僕、夏木涼（なつき りょう）は全寮制の高校で、その寮

のルームメイトとして出会った。柊は高校入学の直前に、身元不明の記憶喪失者として保護され、僕と同時に入学していた。しかし、彼は異世界への移動をランダムに繰り返す異邦人だった。それを真実と知ったのは、高校二年の晩秋、彼が僕を置いて、ひとり異世界へと旅立った後だった。

それから五年半の後に再会した僕らは、ふたりに異世界への旅を続けていた。

* * * *

十分に機が熟した時に逆らわずに飛べば、軽い浮揚感とめまいだけで、次の世界へと移動できた。しかしその時期が来ないうちに次の世界へと飛ぶ事は、ふたりの体に大きなダメージを与えた。衰弱した今の柊の体で旅の扉を開ける事は、

彼にとって大きな危険をとるはずだった。

「柊、無茶だ。手を離せ」

しかし、柊は僕の手を離さなかった。揺らぎはますます広がっていく。僕はあきらめて、弱った柊の体を抱きしめた。

「柊。それならきみの故郷へ行こう。僕も祈る。だからきみも祈れ」

柊が弱々しくうなずいた。柊の故郷ならば、すぐに助けを呼べるかもしれない。彼の旅がランダムで、到着先を選べない事はわかっている。だが、今は祈るしかない。行くのならば、柊の故郷へ。

ダメージの全てが僕へ降りかかるように、無駄と知りつつも僕は柊の体をかばうように抱きしめた。移動が始まってすぐに、柊は気を失い、僕の手を離した。僕は、ただ柊の体を強く抱きしめながら、彼の故郷へと祈り続けた。

長いきしみに耐え、濡れた地面に叩きつけられ、僕も気を失った。

顔にかかる雨を感じ、のろのろと目を開ける。すぐに柵を探す。霧のような雨。日差しだけが明るく降り注ぎ、ガラスのように透明な、低い木々や草達に反射してキラキラと輝いていた。そのガラス細工のような植物の間に柵は倒れていた。はうようにして近づき、声をかける。柵は目を閉じ、苦しそうな顔で、浅い息をしている。「助けを探して来る。柵。待っていてくれ」立ち上がろうとして、柵が僕の上着をつかんでいる事に気がついた。

「行かないで…くれ。話す事が…ある…」
「なんだ？」

「ここは、…僕の…故郷だ。わかる…。帰って来た。僕の…旅は終わった」
祈りは通じたのだ。助かった。

「柵。誰かを呼んで来る。手を離せ」

「ここに…居てくれ」

しかたなく、柵のそばにひざをつき、その手を握る。僕らの居る丘の中腹から、何軒かの家が見える。その中から一番近い家を柵は震える手で指差した。

「僕の家だ。…見覚えが…ある」

あそこなら、急げば十分？ 二十分？ 十分で行ってみせる。静かに降る霧のような雨が、急速に柵の体温を奪っている。

「…すまない…。でも…ぼくが…いなくなっても…」

体中の血が凍える想いがした。だが頭の一部が沸騰する。

「言うな！ 僕がいる！ 僕が助ける！ そんな事は言うな！」

「また…あ…える…」

「ああ、そうだ。また、会える」

「きみは…このせかいで…ぼく…」

「手を離せつ。柊」

「ちち…て…ぼく…は…ん…しん…また…なくて…」

最後は聞き取れなかった。柊の体から力が抜け、僕の手を離す。

僕は上着を脱ぎ柊にかけ、彼が僕の家だと指差した赤い屋根の一軒屋に向かった。熱と旅のダメージでふらつく体をしかりつけ、僕は丘を駆け下りる。すぐに息が切れ、ひざをついた。

自分で思っていたよりも、衰弱していたのだろう。赤い屋根の家にとどりついた時には、ほとんど前が見えなかった。庭に、枯れて透明になった植物達の中に、ひとりの女性が背を向けて立っていた。薄いピンクのまつすぐな長い髪。柊の妹だろうか。柊はなんと言っていた？

『妹の、夢見るような淡いピンクの目』髪は？
髪の色は？

僕は倒れた。薄れて行く意識の中で、彼女が振り向き、その瞳が薄いピンク色だと知る。

僕はその家に運び込まれ、何日も意識を取り戻さなかった。しかし、うわごとのように何度も柊の救出を頼んだらしい。すぐに村人達は丘に登り、そこに死んだ柊をみつけ、その場所に彼を埋葬した。僕が意識を取り戻す前に、全ては終わっていた。

その家の娘リュイから、柊にかけられていた僕の上着と小さな袋を柊の遺品として手渡された。袋にはダイヤの原石が三粒入っていた。柊が常に身につけていたものだ。

心と体が衰弱していると、涙が出ない事を僕は知った。ベッドの上に座ったまま、何も話さず、眠りもせず、食事を口にしない僕のそばに、

リュイは黙ってついていた。

窓の外では激しい雷雨が続き、透明な植物達が押し流されていく。しかし僕の目にはなにも見ていなかった。繰り返し、柎の最後の言葉が僕の中で渦を巻いている。

『…すまない…。でも…ぼくが…いなくなっても…』

『また…あ…える…』

『きみは…このせかいで……ぼく……』

『ちち……て…ぼく…は…ん…しん……また…な…く…』

気がつくくと、差し込む朝日の中で、リュイが僕のベッドのすそに頭を寄せ、眠っていた。雨はやんでいる。彼女を起こさないように僕はベッドを抜け出し、丘に向かう。枯れた植物が洗い流され丘の景色は変わっていた。記憶をたどり、僕は柎を残した場所を目指す。

あの時、振り返り彼を見た。これが最後では無い。そう思った。その光景は今も心に鮮明に残っている。背の低い透明な草木。霧雨が降ってはいても明るかった。全てがキラキラと輝いていた。その中に柎は横たわっていた。

彼は僕の手の中で死んでいったのだろうか。僕は確かめなかった。それとも…、それとも彼は、たったひとりで死んでいったのだろうか。

いつのまにかリュイが僕に追いつき、僕の前に靴を置く。その靴をはき、僕は歩き続ける。リュイは黙ったまま僕の背にコートをかけ、僕の少し先を歩いていく。

丘の中腹に、両手でつつめるほどの小さな石が置かれていた。周りの土が、最近掘り返された事を物語っている。リュイはその石を指差すと、丘を降りて行った。黙ってその石をみつめ、のろのろとその石を手に取り、投げ捨てる。狂ったよう

に、その石を探し回り、元の場所に置く。その場所に座り込み、僕は動けなくなる。

守ると誓った柊に僕が守られた。あのままあの過酷な世界に居たら、僕もまた命を失ったかもしれない。どんなに歩いてても人間らしき生物に出会う事がなかった。無害なのかどうか知る術の無い植物を恐る恐る口にし、木のうろに溜まったにぎり水を飲んだ。

柊が衰弱した体で無理な旅をしたのは、きつと僕を救うためだろう。僕を守るために柊が死に、僕が生きている。その事が許せなかった。柊が居ない事が許せない。

雷雨の季節が過ぎたとはいえ、まだ時折小雨が降る。村人達は簡単な雨除けを僕のために作り、リュイは毎日食事を運んできた。ほとんど手付かずの食事を、彼女は黙ってさげていった。

僕が初めてリュイに声をかけたのは『柊の妹で

はないか?』という問いかけだった。

だが、違っていた。柊の故郷での名前『シュリエ』にも聞き覚えが無いと言った。あの家は初めから、リュイとその母親のふたりきりだった。リュイの母親の髪は緑色。柊のノートには、母の髪は薄紫色と書いてあった。

心が体力を取り戻すと、僕は丘を降りた。そして、柊の家族を捜した。柊を失い、僕はこの世界から移動できない。それでも、柊の家族から子供の頃の彼の話を聞き、僕が僕の世界での彼の事を話し、眠る彼のそばで、彼の故郷で暮らせるのなら、僕はそれでも良かった。

人々はさまざまな色の髪と肌と瞳を持っていた。だが、黒い髪、黒い瞳を持つ者はひとりもない。黒い髪と黒い瞳を持つ父子を、村人のだれもが知らなかった。幸福な異邦人だった柊の父。あいついで失踪した父子。やさしさに満ちたこの

世界であつても、そんな事があれば、だれかの記憶に残るだろう。旅人も、時折訪れる旅の商人も、そんな情報を持つてはいなかった。ここを故郷と感じ「あの家は僕の家」と震える指で指差した柁。それは、死にゆく者に神が見せた幻だったのだろうか。

僕はそのままりユイの家にとどまり、一年後、請われるままに結婚をした。リュイの母は娘の幸せを見届けるかのようにして死に、結婚して一年後、男の子が産まれた。僕と同じ黒い髪と黒い瞳を持つていた。僕はその子に柁の故郷での名前、シユリエと名づけた。さらに二年後、娘が産まれた。

その時に知った。この世界では、両親から産まれた子供は男の子になり、女の子は母親ひとりで作る。この世界の家族や男達が、流動的で、血のこだわりを持たない理由がなんとなくわかつ

た。僕のような人間を、なんの迷いもなく滞在させ、伴侶と選ぶリュイの自由さも、同じ理由からなのだろう。リュイの母親は生涯一度も結婚をせず、リュイを産み、育てていた。血に縛られないこの世界の自由さに安らぎを得た僕は、しかし、柁の生まれ変わりのようなシユリエを、誰よりも愛さずにはいられなかった。

『また…あ…える…』柁はそう言った。シユリエ。僕の息子。

忙しい収穫の季節である夏が終わり、おだやかな秋が始まろうとしていた。そろそろ、風が花や葉を吹き散らし始めている。台所の妻に声をかけ、僕はゆつくりと丘を登る。半分ほど登ったところで後ろから小さな足音が追って来る。

「パ。パア！」

声と一緒に小さな体が僕の腰にぶつかってくる。妻の言うとおりで。どこからでも僕を見つけ

て追ってくる。シュリエは五歳になった。

妻から渡されたかごからタオルを出して小さな手をぬぐい、かごの中の焼き菓子を渡す。シュリエは、妻が花びらから焼いた色とりどりの菓子をほおばりながら、僕の周りを走る。

「あまり走ると疲れるぞ」

結局、僕は疲れたシュリエを抱いて、柁の墓に着く。墓参りとは知らないシュリエが、元気を取り戻し、また僕の周りを走る。

僕は今もまっすぐに柁の墓を見る事ができない。墓を背に座ると村を見下ろせた。あの日に見下ろした同じ場所。今は風が吹き散らす色とりどりの花や葉が、紙ふぶきのように舞っている。秋になって色を失う動植物達。冬になり枯れて透明になる草や木。春先の激しい雷雨。

なにもかもが柁のノートのままだ。それなのに、なぜここは柁の故郷ではないのだろう。時に

は柁のノートの中で暮らしているような錯覚に襲われ、僕のすぐ近くに、そのノートを見ている柁の存在を感じさえする。僕はまだあきらめられない。柁…。

「パ。パア！」

声とともに小さな体が僕の胸の中に飛び込んでくる。そして、不安そうに僕を見上げた。

シュリエは敏感な子だ。僕が柁を思い出し苦しんでいると、こうして僕のそばに来る。

胸の中に抱きしめ「大丈夫だよ。心配しないでいい」そう言いながらシュリエの頭を撫ぜた。いつも柁が僕にしてくれたように。シュリエは頭を僕の肩に乗せ、幸せそうにため息をついた。

僕は柁の墓を振り返り、心の中で柁に語りかける。

『すまない。僕は家族をみつけた。愛しい妻。愛する子供達。僕の半身のようなシュリエ。』

愛する者に愛される暖かき。守りたい者に頼られる喜び。最初はおじいだ。そして次にきみが教えてくれた。そのきみにうそはつけない。僕は今、幸せだ。きみがくれた。でも、一緒だ。いつまでも、きみは僕と一緒にだ』

シュリエが小さな手を伸ばし、僕の首にまわした。

「パパ？」

「ああ、だいじょうぶさ。ここに居るよ。シュリエのそばに」

『ほら、まただ。柊。シュリエは感じ取る。僕がきみへと引き戻される事を許さない』

シュリエが小さな手で僕の顔を引き寄せ、僕の唇にキスをした。

「なんだ？ シュリエ」

「おやすみだよ。パパ。おやすみ」

「おい、寝るのか？」

僕の手の中で、クスクスと笑いながら、シュリエはすでに目を閉じて丸くなっている。

眠り、重くなつたシュリエを抱いて、僕はゆつくりと丘を降りる。僕を止める者が居なくなり、僕は何度も振り返る。

『いつまでも一緒だ。柊』

いつ頃からだろう。柊が言っていた『違和感が溜まつていつて、僕は世界からはじかれる』その違和感を僕も感じるようになっていた。皮膚と空間の境目に、かすかなずれを感じ、手に触れる物に、肌に触れる風に、異質なとげを感じた…。

シュリエが七歳になつたこの春の雷雨では、あきらかに世界の全てが僕を押し出そうとしていた。雷が落ちるたびに空間がはじけ、飛ばされそうになる。無理に自分をこの世界に縛りつける。

僕は疲れ、苛立った。妻が異変に気づき、心配そ

うに見る。その視線さえも、僕の苛立ちの原因になる。

なぜ今になって。この世界になじみ、愛する家族を得、何よりも守りたい者達ができた今になって。そしてなぜ、この僕が柁のように移動させられるのか。

雷雨の合間の短い休息の間には、シュリエが僕のそばに来て、僕の手を握る。僕がシュリエを抱き、シュリエが僕を抱き、僕は胸の中で何度も『なぜ！』と繰り返す。

雷雨の季節が過ぎ、僕は徐々に体力を取り戻した。夏の収穫期を忙しく体を動かして過ごす。僕にも、妻にも、笑いが戻ってくる。

けれど、自由な時間ができると、僕は柁の墓に向かう。その度にシュリエはついて来る。柁を残して、家族を残して、僕は行きたくない。だが、次の春の雷雨の時期を、僕は乗り越えられそう

もない。違和感はますますひどくなり、僕の体の内部で、何か僕を拒否している。雷という刺激が加われば、僕はあっけなくこの世界から押し出されてしまうだろう。柁の墓の前で、今では僕の故郷になった村をながめながら、柁の不在をうらむ。彼が一緒であれば、次の世界へだってためらわずに行ける。僕が泣きそうになると、シュリエが僕を抱きしめに来る。

「パパ？」

『ああ、だいじょうぶだ。きみのパパは、きみのそばを離れないよ』

僕の胸の中で眠るシュリエを抱いて、僕は丘を降りる。今度も眠る前に「おやすみ」と言いながら、僕の唇にキスをしたシュリエ。僕の息子は僕は負けてはいけないのだ。

体の芯から揺さぶられて、目をさます。まくら

元のタバコを探り、火をつける。シナモンに似た甘い香りが部屋に広がっていく。灰皿を持って、隣のベッドで眠る妻を起こさないように部屋を出る。春の雷雨の季節が始まっている。

一步一步、踏みしめるように歩き、窓のそばに立つ。この春一番の激しい雷雨だ。音と光がはじけるたびに、大きな力が僕をどこかへ引きずりこもうとしている。

もう僕はもたない。この力には抵抗できない。しかし…。

力を込めて握った手に何かが触れた。温かなシュリエの両手が、僕の左手をつつんでいた。涙の筋がいくつもシュリエのほほにあった。八歳にしては幼いシュリエ。敏感に僕の苦悩を感じ取るシュリエ。

「部屋に戻りなさい。お前を連れて行きたくは無
い」

目を丸くしてシュリエが聞く。

「どこへ？　ねえ、どこへ行くの？」

「……行かないよ。どこへも行くつもりは無いよ。安心して寝なさい。さあ…」

シュリエが僕の足にしがみつく。片方の手でシュリエの頭を撫で、もう片方の手を窓辺に置いた灰皿に伸ばし、タバコの火を消す。両手でシュリエの頭を抱きしめる。

僕は腰を落としてシュリエの目の高さまで降りていき、笑顔を作る。

「どこへも行かないよ。パパの大事なシュリエを残してね」

いくつもの稲妻が僕を貫く。

小さな足音が遠ざかって行く。そして、ドアを開け、振り返り僕を見る。背中中で、シュリエがドアを閉める音を聞き、気がついた。

なんだ、このデジャブは。絶対に過去に経験し

たはずがないのに、僕は知っていた。今のこの会話を知っていた。見なくても、シュリエがドアのそばで振り返る事を知っていた。

そうだ。柗のノートだ……。何度も読み返し、全てを暗記してしまった柗のノート。そこに書いてあった。

『春先の激しい雷雨の音に目覚めた僕は、泣きながら廊下に出た。窓の下に、父の長い影が伸びていた。まだ八歳だった僕は声を失い、その手に触れた。冷たい。』

「部屋に戻りなさい。お前を連れて行きたくは無
い」

父は低い声で言った。

「どこへ？ ねえ、どこへ行くの？」

「……行かないよ。どこへも行くつもりは無いよ。安心して寝なさい。さあ……」

僕は父の足にしがみついた。僕の頭を撫でる

父の大きな手、その手に染みたまバコの匂い。力を込めて僕の頭を抱き、それから柔らかく押し戻す。僕の目の高さまで降りて来て、笑顔で言った。

「どこへも行かないよ。パパの大事なシュリエを残してね」

部屋のドアから振り返ると、父はまだ窓の下で雷雨を見ていた。稲妻が、罪人のように父を貫き、長い影が廊下に伸びた。目を閉じたベッドの中で、しかし父はまだ外を見ていた』

心の奥から湧き上がる寒気をこらえながら、シュリエの部屋のドアまで行く。

シュリエはきみか？ 柗。きみがシュリエなのか？

『また……あ……える……』

柗はそう言った。会えていた。こんな近くに。

そうなのか？ 柗。

ドアを開けて、そこに、不安にかられ眠れぬシユリエをみつけたら……。そう思うと、僕はドアを開ける事ができなかった。

翌朝、妻はストレートの髪に、ゆるやかなウエーブをかけていた。テーブルの側でくるりとまわって見せ「どう？」と僕に聞く。

「きれいだよ」

なにかあると妻は髪を巻く。なにか……。そうだ。もうすぐ結婚記念日だ。記念日にはいつも家族で丘に登る。妻が焼いたケーキを、柁の墓の前でみんなで食べる。

『いつ行くの？』

問いかける妻の瞳に気づかぬふりをして、妻とおはようのキスをする。ほほやおでこではない。唇へのキス。

リュイの世界に口づけの習慣はなかった。僕が

初めてリュイにキスをした時、彼女は目をまるくして「まあ！」と言った。僕は「ただの挨拶さ。僕の世界ではね」と言った。その言葉を信じ、妻はそれを家族の間の挨拶にした。

シユリエが寝不足な顔をして入って来て、リュイとキスをする。

『：母は、なにかと僕らにキスしたかった。おはよう。いつてらっしやい。ありがとう。おやすみ』

二度目に会った時に柁はそう言った。思い出がリフレーションする。

若い頃。ピンク色だったリュイの髪は、年ごとに濃くなり、藤色に近くなっている。あと何年かしたら、薄い紫色になるのだろう。

『僕は今になって思い出す。母の薄紫色した髪、透き通るようなピンクの目。妹の柔らかな草色をした肌、夢と愛が交錯する淡いピンクの目。そ

して父の……父だけの黒い髪、黒い瞳』

追つて来たシュリエに家に帰るように言い、柀の墓に、僕は初めて真正面から向き合う。

『答えてくれ、柀』何度も繰り返して聞く。違うと言つて欲しい。けれど、答えはすでに出ている。最後に柀は言つていた。

『ここは僕の故郷。あの家は僕の家』

うすうすは感じていた。柀の旅は、時間も越えているのではないか。そして今、答えがあつた。

柀が追い求めていた彼の父は、僕だ。

『「シュリエ！ シュリエ！」母が台所で僕を呼ぶ。

「パパはどこ？ お前知らない？」

「パパはどこつて？ 僕は知らない！」

泥だらけの僕は庭で答える。

「行つてしまったのかしら？ 行つてしまった？」

それでは、あの人はもう……」

台所で母は泣いた。紫色の髪の中で僕の指が踊つた。あの夜から、まだ三日しかたつていなかった』

柀のノート通りなら、僕はあと二日でここを去る。柀の墓を置いて。いずれ旅立つシュリエを置いて。家族を置いて。僕のものにもかもを置いて。

その夜、妻にすべてを話した。

「なぜ、そんなひどい事を言うの」と妻は泣いた。

異邦人の僕が、また旅立つ事。それは受け入れた。だが「シュリエの事は信じられない」と言つた。そうだろう。小さなシュリエまでがいつか旅立つ事。そして、丘の中腹で眠る若者が、帰つて来たそのシュリエだという事。母親ならば受け入れられるはずはない。だが、話しておかなければならなかった。僕がいなくなった後の、柀の墓を彼女に託さねばならない。そして、僕の墓の事

も。柁の墓の横に。心だけはそこに残して行きたかった。

リュイは嫌だと言った。そんな事は考えたくない。僕は何も言えなかった。でも、リュイはそうする。僕は知っている。そう柁のノートに書いてあった。

『父の葬儀の日に、草木はいつせいに萌え始めた。

妹は、八歳の僕よりも大人だった。その妹に片手を支えられ、母は葬儀を耐えた。手に手に沢山の草木を抱え、華やかに人々は丘に登った。その列に少し遅れて母と妹が、その後から僕が行った。草木と人々の髪と。考えられる限りの色の洪水の中で、今、ひとりの人間の存在に終止符が打たれようとしているなんて。カラッポの棺に、僕らが持つてきた色とりどりの葉が詰められ、それが父の代わりだった』

家族ですごく最後の日、柁の遺品として渡されたあの日の上着に着替え、ポケットにあの小袋を入れ、シュリエを探す。雷雨の最後の時期、久々に晴れた庭の、ぬかるんだ庭土で、シュリエは泥だらけになつて遊んでいた。僕は、何気ないふりを装つてシュリエに近づく。びつくりしたように僕を見て、顔中で笑うシュリエ。この、歳よりも幼い息子に、事實は告げられない。彼の両手を握り、言葉を捜す。

「よくお聞き。シュリエ。これからきみに辛い事がおきる。きみはひとりになる」

目を丸くするシュリエ。

「でも、必ず会える。きみの半身に」

「ハ……ン……シン……？」

「……。友達だよ。大事な、きみを助けてくれる友達だ」

「なら、いいや」

「半身をみつけたらね、手を離してはいけない。いいね」

「うん。わかった。パパ」

そう言つて、遊びに戻るシュリエ。そのまま、僕の苦痛に気づかせてはいけない。笑いながら、震える足で、彼から離れていく。空気が、僕の体の表面でさざなみをたてている。雷雲が近づいているのだ。家の角を曲がり、シュリエから見えない所まで来て、僕はしゃがみこみ両手を見た。柀の最後のことば。その意味が今わかった。

『きみは…このせかいで…ぼく…ちち…て…ぼく…は…ん…しん…また…なくて…』

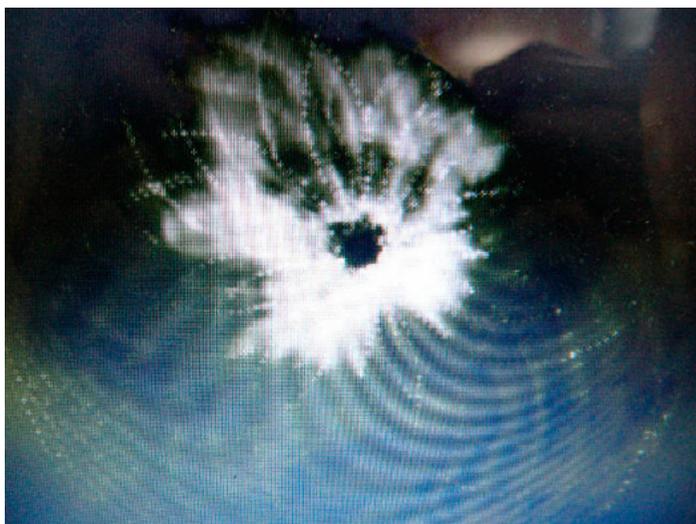
柀は『この世界で僕の父に会ったら伝えてくれ。僕は半身をみつけた』と言いたかったのだ。

僕はシュリエに言った。

『半身をみつけたら、手を離してはいけない』

僕の手を離した時、あの時、柀は僕の腕の中で死んだのだ。僕の手にはシュリエの手の泥がついている。かまわず顔をおおった。空間が揺らぎだし、僕を包んでいく。近くで雷の音がして、強い光が指とまぶたをとおして僕の目の奥を打つ。移動が始まった。

つづく



写真／レイラ・アズナブル